

「東京新聞」の「平和の俳句」、11月掲載の句を紹介し、感想を述べたい。

「卒寿過ぎ望む一人居（ひとりい）最後まで 赤山寿々子（すずこ）（96歳）」  
くいと  
うせいこう 一人でいることを強要されているのではなく、望んでいると九十六歳の作者は句を詠む。最後の連絡船で釜山から帰国した人の今の平和。> 釜山から帰国された96歳の赤山氏は戦前、戦中、戦後と大変な苦勞をしたことだろう。今、一人居の穏やかな暮らしをしておられる。平和がどんなにありがたいものであるかを実感しておられる。最後まで、その生活が続いてほしいと願う。そして、それは叶えられるであろう。

「死の外（ほか）に一大事なし今日の月 生田比呂志（91歳）」<金子兜太「死それも無理強い死に直結するのが戦争。一大事だ。」> くいと  
うせいこう 九十一歳の達観。生きていることが最も大事と今日を生きて月を見る。> 91歳になる生田氏は、今日も平安に暮らしおられ、一大事は「死」だけだと言われる。生田氏の場合、死もまた、平安に迎えられるのではないか。人を殺したり、殺されたりする死はごめんである。天寿を全うできる世こそ、全ての人の望みである。

「信濃路や尾花の中の無言館 木幡（こはた）雅好（まさたか）（81歳）」<金子兜太秋の信濃路の無言館は、戦没画学生の遺作の痛恨と悲しみを深く伝える。日高安典と佐久間修の「裸婦」の前で涙ぐむ人もいた。> 私は「無言館」に3回、行った。夭折した画家たちの無念さ、悲劇を思うと、無言でしか見られない。「無言館」を建てた窪島誠一郎氏は『無言館への旅』に「今ここにこうして生きている自分のために、何より絵を描くことに真一文字につきすすんで燃焼して逝ったかれらの美しい生命のために、『無言館』をつくらねばならないと思った」と書いている。生かされている者たちは、彼らの「美しい生命」にどう向き合うかが問われている。

「秋雨（あめ）のデモ抗（あらが）う人の美しき 新屋（しんや）康夫（67歳）」<金子兜太「抗う人」は批判し抵抗する人。「美しき」はズバリ。> くいと  
うせいこう 抗う人は邪魔扱いされるべきではない。自己の利益を超えて抗う人。>「抗う」という言葉は否定的な響きがある。しかし、戦争をしよう、させようとする人々に、その風潮に抗う姿は美しい。秋雨（あめ）に濡れながらのデモなら、なお更ではないか。『チェルノブイリの祈り』などでノーベル文学賞を受賞したベラルーシのアレクシエービツ氏は来日し、下記のように語っている。「全体主義の長い文化があった我が国と同じく、日本社会は抵抗という文化がないようにも感じた。」人を愛し、平和を実現するために「抗う」ことを「美しい」とする文化へ高めたいと切に思う。

「平和を希求する小さな旗を一本、ここに掲げる」と巻頭言に書いて、俳人・夏井いつき氏がミニ句集「旗」を出した。7月に開かれた「平和の俳句」のライブ選考会で、金子兜太氏といとうせいこう氏と共に選者を務めたのを機に、これに強く共感した。「この一冊を『これは軽やかな平和運動です』というお二人の志へのささやかな参加表明です」と宣言している。ライブの選句を通して、「もっといいものができるはずだ」と挑戦する意欲がわき起り、30句からなる句集となった。「一本の百合のごとくに戦わぬ」毅然として戦わず立つ一本の百合、私は百合のように綺麗でなくとも、個を持つ者でありたい。「野分来る吾は一本の旗である」嵐が来ようとも、一本の平和の旗を立て続ける。なんと潔いことであろうか。「ミサイルをたんぽぽ弾で撃ち落とす」ミサイルを撃ち落とすとスターウォーズ計画が立てられたが、たんぽぽ弾でミサイルを撃ち落とすと言う。自然の野の平和が戦争を無化するのである。さすが、俳人の孤高で凛々しい句にハッとさせられた。